

活用したい遺伝資源（3）

－ ササユリ －

1. 資源の分布

ササユリは日本特産で、中部地方以西および九州の一部に自生しています。また、本県南部の熊野山中には「ニオイユリ」と呼ばれる変種が発見されています。

2. 自生地の環境

(1) 雑木林や竹林の周辺、伐採や植林をして4～5年後の山でこもれ日があり、日照時間が平坦地の1/2程度のところです。

(2) 下草にはササ、ススキなどが多く、毎年秋に下草刈りをしているところです。

(3) pH4.1～5.4の酸性で、ECは低く、りん酸、苦土等の含有量も低い土壌です。

3. 特性

草姿は清楚で、草丈50～100cm、葉は形はササに似て光沢があります。自生地では5月下旬から6月に開花し、花は径10～14cmで横～斜め下向きに開きます。花色は濃いピンクから白色に近いものまで多様で、上品な香りを漂わせ、万葉の昔から日本人に親しまれています。

4. 増殖・栽培

従来、ササユリの球根は繁殖率が低く、実生では開花までに6～7年の養成が必要です。しかし、無菌は種と低温処理の併用で4年間、りん片培養と低温処理を組み合わせると3年間で開花が可能になりました。

栽培は、他のユリに比べて難しく、環境に敏感な植物です。

☆栽培のポイント

- (1) 半日陰で排水のよいところを選びます。
- (2) 地温の上昇を防ぐため、4月以降50～70%の遮光を行います。
- (3) 土壌pHは酸性を保ち、肥料のやりすぎに注意します。
- (4) ウイルス病は大敵です。芽が伸び始めたら定期的に薬剤散布し、アブラムシの防除を徹底します。
- (5) 球根の低温処理は容易です。また、低温処理球を用いて、定植時期を変えると開花時期を調節することができます。



5. 資源としての利用

(1) ふるさと産品

中津村では、「ササユリ普及育成協議会」を結成し、地域が一体となって切り花生産に取り組んでいます。2002年には、村内生産農家6戸、切り花出荷本数約5,000本に達し、ふるさと産品として期待が集まっています。

(2) 観光資源（自生地の復元）

シンボルフラワーとして指定している市町村は全国で47市町村、和歌山県で7町村に達しています。金屋町や本宮町では自生地の復元に取り組み、観光資源としての活用を模索しています。これには、山林や里山の手入れが必要です。まず、秋の草刈りと草の持ち出しから始めるよう呼びかけています。

(3) 育種素材

テッポウユリやヤマユリの仲間と交配によって種間雑種が得られます。また、胚培養によってカノユリの仲間との雑種作出も可能で、育種素材としても期待されています。

（育種部 宮本芳城）